特集（後編） 修学旅行生の受け入れ家庭を募集しています！

市では、都市部からの修学旅行生に市内の家庭で宿泊・体験してもらう「民泊（みんぱく）」を行っています。

民泊では、①修学旅行生の宿泊受け入れ（3～4名、1～2泊）②体験の提供（農業体験、田舎体験など）③集合場所への送迎を主にしていただきます。

今回の特集（後編）では、実際に民泊の受入をされている家庭の皆さんの声をお届けします。市民の皆さんの参加もお待ちしています。

【問い合わせ】 かのやツーリズム推進協議会
（市商工観光課内） ☎0994-31-1121

「民泊」受入家庭の声 Vol. 1

家族みんなで楽しく頑張っています！

上之原さん
神野地区

民泊を始めて10ヶ月。
これまで12人の生徒
を受け入れています。

初めは緊張して不安もありましたが、子どもたちの方から、溶け込んで来てくれました。

●家族の気持ちで

民泊のコツは、客人扱いをしないこと。見栄を張らず、ありのままで接する。家族が集まる位の感覚で…。あとは、子どもが好き、料理が好き、やる気があれば大丈夫ですよ。もちろん私もすべて一人でやらずに、主人や隣に住んでいる息子夫婦、娘などの協力をもらい頑張っています。

●食事について

ご飯は決まって、地場産の食材を使った田舎料理。普段食べているものに少し手を加える程度ですが、子ども達は、美味しいと喜んで食べてくれます。また、食事は家族が揃って食べる。賑やかですよ（笑）

気を使うことは、子ども達の体調管理。事前にアレルギーや嫌いな食べ物などの情報が届きますが、ミスのないよう注意しています。

●思い出

民泊は大変なこともありますが、楽しいことも沢山あります。先日は、誕生日の子がいて、手作りケーキで祝ってあげました。後で御礼の手紙に「一生忘れません」と書いてありました。本当に嬉しかったですね。また、隣に住む3人の孫も、今では「お兄ちゃんはいつ来るの？」と聞いてくるほど。

大自然に抱かれながら、農作業や川遊びなどの田舎暮らしを体験してもらい、神野に行って楽しかった、良かったと言って貰えるようこれからも頑張ります。

「民泊」受入家庭の声 Vol. 2

素敵な出会いに感謝！

瀬脇さん
古江地区

民泊を始めて3年！
これまで39人の生徒
を受け入れています。

子ども達は、錦江湾を見下ろす風景、地元の食材を使った新鮮な魚料理、静かな闇夜に聞こえる波音など、何気ないことに感動してくれます。

●民泊中の過ごし方

体験は、近くに住む両親と妹（受け入れ家庭）とともに、砂浜で拾った貝殻でフォトフレームやキャンドルを作ります。農作業は近くの体験農家の人にお願いし、基本から楽しく学んでいます。

民泊の受け入れは最初から抵抗は感じませんでした。我が子と同年代なので、いつも友達が遊びに来る位の感覚を意識し、気を使いません。それが大切だと思うし、子ども達は嬉しく感じるようです。

●気をつけていること

健康管理には気を使います。持病やアレルギーを持つ子もいますので、心構えは必要です。

でも、言葉に表せない素敵な出会いを感じています。長男も寮生活をしていますが、別れは、我が子を送り出すのと同じ気持ちになります。

●教えてもらったこと

都会の子と一緒に鹿屋の歴史や文化、産業などを学んだり、逆に都会の情報を聞くことは家族で勉強になるし、良い刺激を受けています。つまり、我が家族も一緒に体験活動です。これは、子育てをする環境としては最高だと思っています。だからこのツーリズムに秘められた魅力を、同じ年代の子どもを持つ人たちに知って欲しいと思います。

今では、家族全員、次の出会いを楽しみにしています。

●今後の修学旅行の受入予定

年	期　日	学　校　名
平成26年度	10月16日から1泊	京都府立綾部高校
	12月2日から1泊	広島市立城南中学校
	1月28日から1泊	尾道市立因北中学校
平成27年度	5月13日から1泊	高砂市立荒井中学校
	5月20日から1泊	神戸市立住吉中学校
	6月3日から1泊	神戸市立西神中学校

●民泊情報

○受入をされた家庭には体験料（目安：生徒1人当たり1泊2食＋体験で5,500円）が支払われます。
○農家でなくても受入ができます。ご家族や地域の人たちと協力して受け入れることも可能です。

●民泊をもっと詳しく知りたい。

「宿泊のみ」又は「体験のみ」提供できる方も募集しています。担当者が民泊に関することを分かりやすく説明しますので、お気軽にお問い合わせください。

●子ども達からは、お礼の手紙が届くことも

（手紙）
手長えびなどの生物がたくさんいる、鹿屋のきれいな川に驚きました。また、夜に真っ暗な中、みんなで見た蛍、あまりの多さに感動しました。本当に言葉で言い表せないほど、貴重な体験をさせて頂きました。正直、別れるのは悲しかったけれど、お体に気をつけて。俺のこと忘れないで下さい。本当にありがとうございました。

▲文章は実際に子どもたちから届いたお礼状から抜粋